

ポーランド名画ビデオ鑑賞会

会場：札幌エルプラザ 4F 大研修室 B,C

(北8西3、JR札幌駅北口より徒歩3分)

日時：2019年2月20日(水) (開場18:00) 上映と懇談会 18:30~21:50

『大理石の男 Człowiek z marmuru』1977 アンジェイ・ワイダ監督

第31回カンヌ国際映画祭 国際映画批評家連盟賞 受賞(1978)

入場無料・予約不要・先着50名

1976年のポーランド。映画大学の女子学生アグニェシカ(クリスティナ・ヤンダ)は、彼女の第1回ドキュメンタリー作品としてテレビ局で仕事をするようになった。彼女は、50年代の労働英雄の姿を描くことで、その年代の人々や周囲の状況を伝えようと思ふあたり、主人公の調査のため博物館に行った。そして、その倉庫の隅で、かつて有名だった煉瓦積みエマテウシュ・ビルクート(イェジー・ラジヴィオヴィッチ)の彫像が放置されているのを発見した。

ビルクートは、戦後のポーランドで最初に建設された大工業プロジェクトの建設に従事した労働者だったが、現在の消息は不明だった。そして、生き証人とのインタビューを通じて、彼女は一人の労働者を浮き彫りにしてゆく。

映画監督ブルスキ(タデウシュ・ウオムニツキ)は、当時統一労働者党員が組織したデモンストレーションでビルクートは煉瓦積みの新記録を打ち立てたと語った。マスコミは彼にとびつき、彼を描いた映画で、ブルスキも監督として新しい道を歩むことになったのだ。

次に会ったミハラック(ピョートル・チェシラク)は、もと保安隊の将校で今はストリップ劇団の座長をしているが、彼はビルクートの経歴を詳しく知っていた。ビルクートは煉瓦積みチームの班長だったが、そのデモンストレーションに参加した時、熱く焼けた煉瓦を渡された。それはサボタージュの意図だったが、同僚の一人が犯

人として疑われた時、ビルクートは彼をかばい、共に刑務所に送られることになり、ビルクートは職も名誉も失ってしまったのだ。出獄したビルクートは、入獄中に別れた妻を探していたということだが、めぐり逢えたのかは定かではなかった。

ビルクートの前妻がザコパネにいらしいということからその町を訪ねたアグニェシカは、彼女に会った。そして、彼女の悲惨な生活と夫との再会の話に胸うたれた。しかし、主人公がみつからなくては映画は完成できないだろうということでテレビ局が、彼女の企画を没にしてしまった。

困ったアグニェシカは、父(ズジスワフ・コジェン)に相談する。父は、彼女に平凡な真実こそが何よりも大切であること、映画が完成するというよりも、彼女が追求したそのものが真実だということを説明する。彼女は、ビルクートの息子がグダニスクの造船所で働いていることを知り、彼を訪ねた。ビルクートはすでにこの世になく、それ以上のことは、息子の口から聞き出せなかった。しかし、彼女はあきらめない。彼女はビルクートの息子と共にワルシャワに向かった。(Movie Walker より)

アンジェイ・ワイダ(Andrzej Wajda, 1926.3.6-2016.10.9)は、ポーランドの映画監督。親日家として知られ、京都賞 1987、高松宮殿下記念世界文化賞 1996を受賞した。代表作:『地下水道』1957、『灰とダイヤモンド』1958、『夜の終りに』1960、『約束の土地』1974、『コルチャック先生』1990、『パン・タデウシュ物語』1999、『カティンの森』2007、『ワレサ 連帯の男』2013、『残像』2016など。

